

仮想的な質問を活用した habit formation の検証：日米パネルデータを用いて¹

岩本光一郎²

本稿では仮想的な質問により、恒常所得の変化時にどのような消費行動の変化が期待されるかや予備的貯蓄動機の強弱を知ることができる「くらしの好みと満足度についてのアンケート」の日米パネルデータを用いて、①「合理的習慣形成と整合的な消費パターンを選好する世帯」②「予備的貯蓄動機が弱い世帯」をピックアップしたサンプルを構築した上で、Dynan 型オイラー方程式による習慣形成仮説の検証を行った。得られた結論は、日米家計共に「合理的習慣形成と整合的な消費パターンを選好し、予備的貯蓄動機が弱い世帯」からですら、習慣形成仮説と整合的な結果は得られないというものであった。また選好消費パターン以上に予備的貯蓄動機が習慣形成パラメータの推定結果に影響を与えているが、その方向性が想定と異なる部分があり、その理由の探索が今後の課題である。

JEL Classification Codes: D12

Key Words: 家計消費, habit formation, パネルデータ, 仮想的質問

¹ 本稿では大阪大学 21 世紀 COE プロジェクト「アンケートと実験によるマクロ動学」及びグローバル COE プロジェクト「人間行動と社会経済のダイナミクス」によって実施された「くらしの好みと満足度についてのアンケート」パネルデータを利用している。ここに記して謝意を表したい。また本アンケート調査の作成に寄与された筒井義郎・大竹文雄・池田新介の各氏については、特に感謝したい。

² 愛知東邦大学経営学部。連絡先：iwamoto.koichiro@aichi-toho.ac.jp